

今宵は切なく
鳴いてはならぬ



切傷甲作

沖村まどかの日課は、毎夜の自慰行為であった。

彼女がまたがるお気に入りのベッドボードの飾りには愛液が丹念に塗り込まれ、すっかりいやらしい匂いが染みついている。今宵もまどかはネグリジェの裾を咥え、声を押し殺しながら一心不乱に腰を振っていた。

充血した乙女の陰核が、薄手のパンティ越しに刺激を与えられる。男を知らない肉壺から涎が溢れ、桃色の唇を潤わせパンティを湿らせていく。

(犯して……誰か私を、いやらしい私を犯して……♡)

か弱い自分が乱暴に犯される様を想像してまどかはより一層興奮し、快感に夢中になった。

妄想の中で、彼女は激しく犯されている。大きな胸がさらに大きな手で揉みしだかれ、丸い尻を何度も男の下腹部が打ち付けた。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「あんっ♡ あんっ♡ いやんっ♡ だめっ♡
中だけはっ♡ 中出しだけは許してっ♡」

強姦者はまどかの懇願を無視して、汚らしい粘液を彼女の胎内に注ぐ。ねっとり広がる熱は彼女の子宮を、腰を、脊髄を、そして頭を、じんわり溶かしていった。

「イクうっ……♡ イっくううう……♡♡♡」

汗だくの身体がブルブル震える。鼻息は荒く吹かれ、裾を噛み締める口から切なげに小さな声が漏れる。乙女を中毒にさせる快感が、まどかの全身を波打たせていた。

その時だった。寮のスピーカーから男性教師の荒々しい声が響いた。抜き打ちの自慰行為検査が行われる合図であった。よりにもってそれは、まどかの寮部屋が対象となっている。

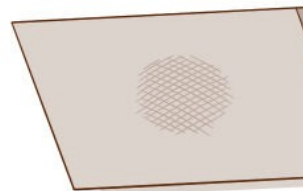
まどかは余韻を味わう暇もなく、急いで部屋から出た……。

「部屋番号214から
217までの生徒！」

「今すぐ部屋から出て
廊下に並びなさい！」

「これより
抜き打ちの
自慰行為
検査をする！」

「着衣はそのまま
5秒以内に
出て来い！」



「……どうしよ……」

44

「良いか
お前達！」

「学生の本分は
学ぶ事にある！」

「自慰行為にふけて
その事を疎かにするなど
言語道断だ！」

第五ヶ条

自慰行為を

禁ず。

「まさか、純潔な学生生活
股間をいじくり回して、
下着を汚している者など
居るわけ無いよな？」

女……♡

「……」

「隠しても無駄だ
ニオイで分かる
からな……!」



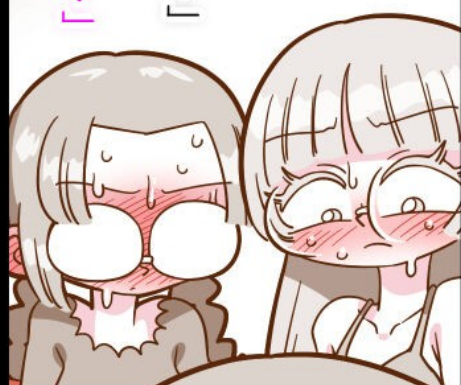
「まあ 誰か
検査をする
かなあ?」

「パンティを
ヌレヌレに
してそうな
奴は……」



「お前か?
それとも
お前か?」

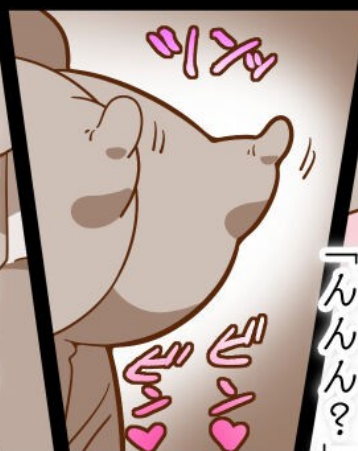
「ん……?」



「んん?」

あふあふ♡

「んんん?」



「なにが匂うぞ
沖村まどか!
欲情した女の
フエロモンが
プンプン匂うぞ」

「!!」



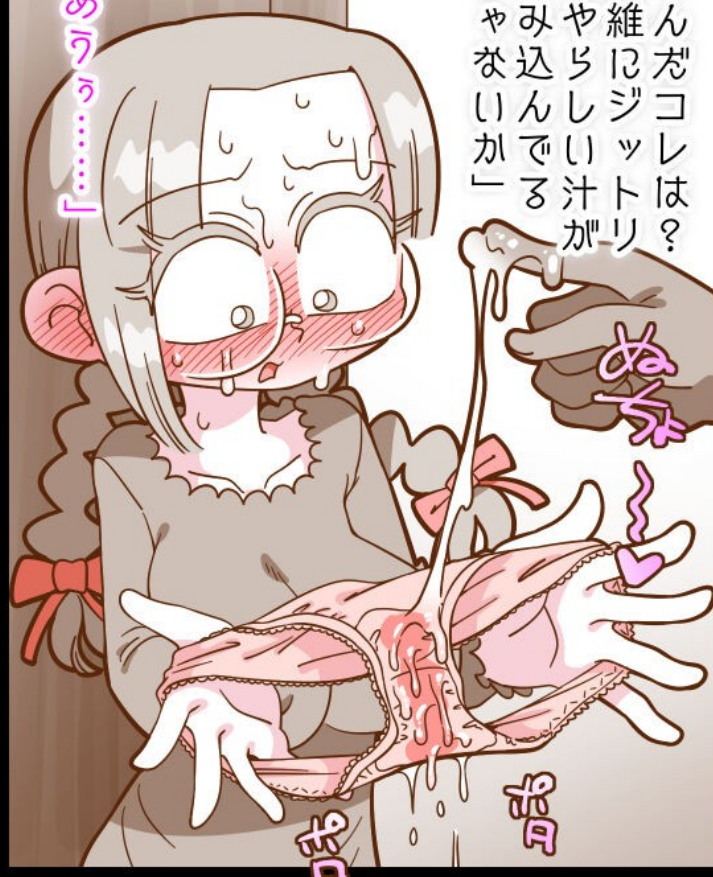
「だから
止めとけって
言っただのよ!」



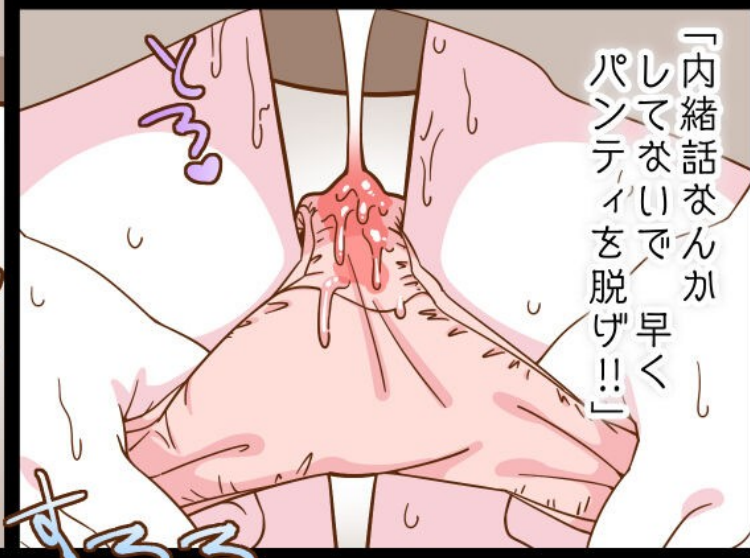
「う……
ガマンでき
ないん
だもん……」

「なんだから?
繊維にジットリ
いやらしい汁が
染み込んでる
じゃないか」

「あうう……」



「内緒話なんか
してないで 早く
パンティを脱げ!!」



「こうなっ方り
マンコも直接
検査するぞ!」

「パジャマを
たくし上げて
股を開け!」

「は……は……
はい……」

「あうう……」

「馬鹿者!!
こうやって胸まで
全部上げんか!!」

「!?」

「力を抜け!
触診検査だ!」

「あっ!!
ゆびっ!」

「ヒッッッ!!」

test 000

「やっやっ!!」

「ヒッッッ!!」

「あぁっ！
せ先生っ！
だめえっ！」

「パンティどころか
マンコの奥まで
ねっとりヌメって
いるじゃねえか」

「ち
違うんですっ！
オリモノで……っ」

「それにしちゃう敏感に
なってるみたいだぞ？
気持ちよまずうに
腰を跳ねませやがって」

「あぁんっ！
先生だめえっ！」

「し
破けちゃうっ！」
処女膜

「口では嫌がってても
乳首はこんなに
嬉しがってるぞ？」

「あぁんっ いやんっ！
は、激しくしないで
下さーいっ……っ！」

「これが本当に
オリモノだって?」

「どう見ても
エロマンコ汁じゃ
ねえか……?」

「はあ……」

「はあ……」

「せ……」

「せんせ……」

「ご……ごめん
なさい……」

「皆が明日の予習の
為に勉強している時に
お前はオナニーを
してたんだけ!」

「言い逃れは
出来んぞ!」

ネトネト

おんおん



ゼツ

滑

滑

ゼツ

「ごめんなさい……
皆が勉強してるのに……」

「オナニーなんかして
ごめんなさい……!」

「声が小さい!!」

「オナニー
して
ごめん
なさい!!」

「オナニー
して
ごめん
なさい!!」



「寮の規則を破った者には
罰を与えねばならん！」

「せ 先生っ！
待って下さい！
それだけはっ！」

「おちんちんを
入れるのだけは
許して下さいっ!!」

「あ あ あっ!!
だめえええっ!!」

「駄目だ!
処女膜を破られる
痛みで自分の罪の
重さを自覚しろ!!」

「ひいひいっ!!」

「おっ
おごっ!!」

「俺のペニスで……
処女喪失しろ!!」

「んざいっ!!」

「うう……
あぐ……」

どん!

サチュン!!

「あつ……
あつ……！」

ニギニギニギニギ

「そ
さんなっ
わさん
わさん
はしめ
めて……」

ぬい
……

「勉強を疎かに
する者は
こうなるんだ！
お前も良く
見ておけ！」

「あ
あ
あ……」

「それだけ丹念に
マンズリかいて
やがっちゃんだ？」
「すっかり膣が
ほぐれて
チンポに
絡みついて
るぞ！」

「あぐっ
うぐっ
やめ
やめ
てえ……」

ずんずん
ぬい
……

ゴ
……

ど
……

「念願のセックスだぞ?」

「もっと喜べ!」

「うううっ先生止めてえ……!」

ぬるるん!

「駄目だ!他の者へも見せしめでもある!」

「お前が犯されてる惨めな姿をちゃんと見てもらうんだ!!」

アハ!!

「きゃあっ!!」

「ひいっひいっひいっひいっ!!」

「ちゃんと勉強しないと男に股を差し出すな生きや生きていけなくなるぞ!」
「それが嫌なら勉強をしろ!!」

「勉強出来ない女は大人しく孕んでろ!!」

「いやっ!!いやっ!!だめ先生!」

ぬるるん!

トキーン!

ぬるるん!

アハ!!

アハ!!

「中に出しちゃっ……
ダメえええっ!!」

「あっ あっ……
そんなっ……」

「中…… 精液……
赤ちゃん出来ちゃう……」

「勉強が出来ない
なり大人しく
がキ産んでろ!」
「それしか能が
無いんだからよ!!」

「あ あ 赤ちゃん……
先生との
赤ちゃん……」

「何ボサつとしてんだ
舐めて綺麗にしろ!!」

「はへっへえっ!?
いいやんっ!!」

「ばっちいつ……!!」

「誰のせいで
汚れたと
思ってたんだ!!」

「むぐぷっ!!」

「ポッ!!」

「んっっ!!
んむううっ!!」

「歯を立てずに
喉奥まで
咥え込むんだよ!」

「ほほほ」

「嫌っ……!!
先生のおちんちんの
毛のニオイ……
嗅がまれちゃううっ!!」

「ビュ!!」

「べろべろ
舐め回して
チンポ洗え!!」

「ぶぶぶっ!!
じゅぶぶっ!!」

「売春婦
み方いで
お似合い
だぞ!」

「んぐぷうううっ!!」

「ほほほ!!」

「おらっ！
ザーメンの味
覚えろ！」

「むぐっ！
ごぶうっ！」

「エロい事の
勉強なり
喜んで
するだろ!?」

「んふーっ！
ぶふーっ！」

「もうオナニーなんか
しなくて済むように
毎日先生がレイプ
してやるからな！」

「あうう……
いやあ……」

「ち ちゃんと……
勉強します……
許して下さい……」

あーっ
うーっ
うーっ

あーっ
うーっ
うーっ

「あううっ！
はうううっ！」

「許すわけっ！
ねえだろっ！
性奴隷がよっ！」

「んーっ！
うううっ！」

「オナ狂い女に
二度目のチャンス
なんかねえんだよ！」

はぁっ！
はぁっ！
はぁっ！

「ちゅっ……♡」

「反面教師として
無様な姿を
皆に見せつけろ！」

「おっ
ちん……♡」

「いやらしい
音……♡」

「あううっ！
はうううっ！
はひいりんっ！」

はぁっ！

はぁっ！

「はぁ……♡
はぁ……♡」

「すごい……♡」

はぁっ！

はぁっ！

はぁっ！



「じゅせいしますか
オナニーしちゃうおバカな
私をゆるしてえええっ
♡♡♡♡♡」



「むぐうう……」
「赤ちゃんに
なりゆう……」



「って何 何!？」
「きゃー!」
「来ないでー!」



「るるん♡
私のまどか
ちゃんの卵子!」
「子宮がポカポカ
で温かいから
ピクニックに
来ちゃっろ♡」

「ん？ なんだ
このニオイ……」

「お前達からも
オナニー馬鹿女の
エロいニオイが
漂って来るぞ」

「今すぐ全員
パンティを
下ろせ！」

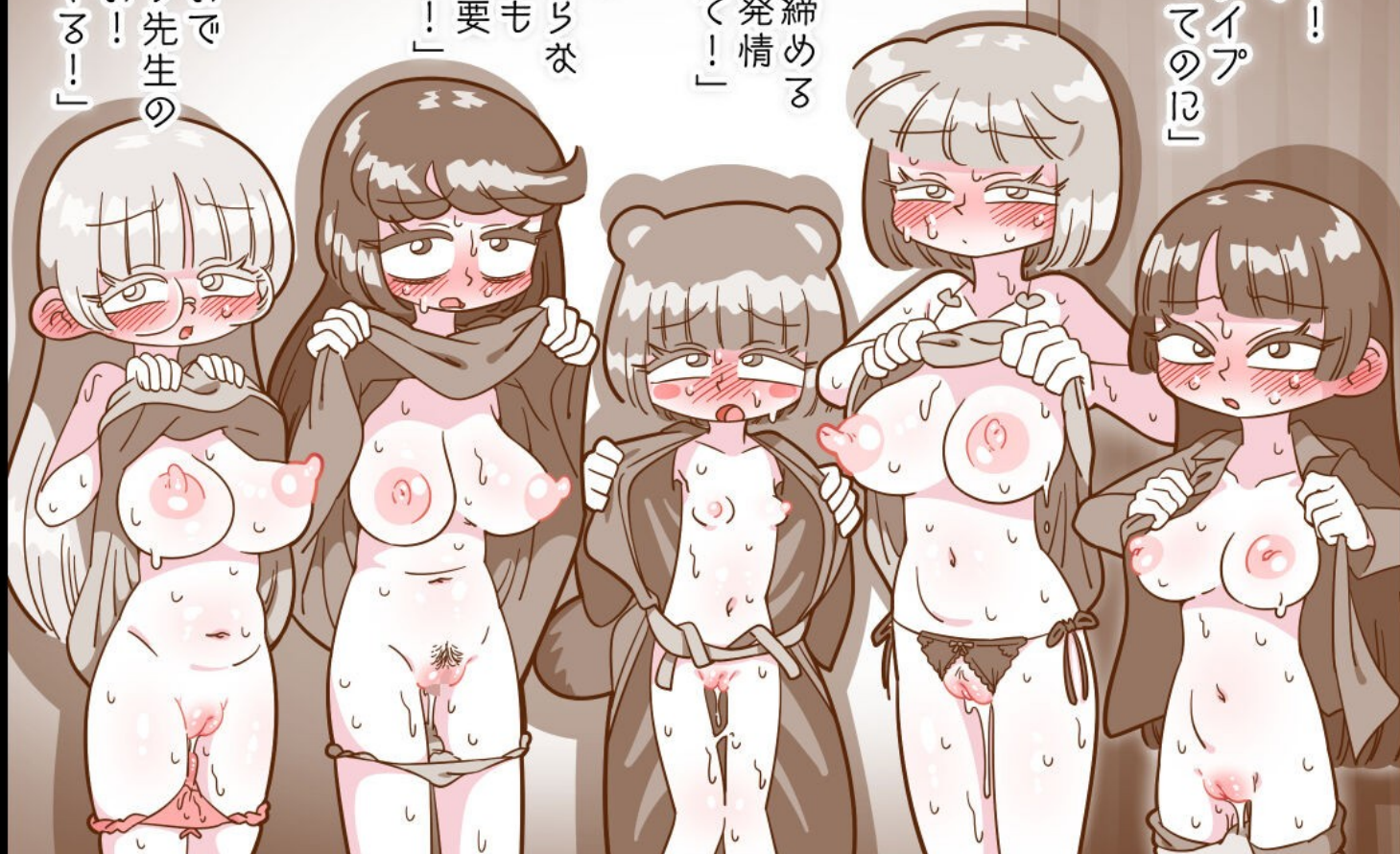


「全く……！！
目の前で
友達がレイプ
されちうてのに」

「気を引き締める
どころが発情
しやがって！」

「そんな
ふしだらな
生徒にも
罰が必要
だなあ！」

「服を脱いで
一人ずつ先生の
前に来い！
犯してやる！」



「欲情しただけで先生の前に来い！ヒトミのようなイイ女ならいつでもレイプしてやるからな！」

あーん！

「あ
ん
つ
♡
♡
♡

「何で方ぬきが
学校に居るんだ！
駆除だ駆除！」

「これくらいい
ぽっちゃりが
一番工口いんだ！」

びびる!



「やっぱり女は
チンポの事しか
考えとらんのか！」

「罰として毎日
レイプしに来るからな！
夜になつたリマンコ
温めておけ！」

「えっぶり
オナニーして
レイプの準備
します……♡」

「はい……♡
先生……♡」

「はあ♡
はあ♡」

今宵も、まどかはお気に入りのベッドボードの飾りにまたがって、自慰行為に耽っていた。いつもの様にネグリジェの裾で声押し殺す事も無く、寮に響くような大きな声でいやらしく鳴いていた。

「ああんっ♡ あああんっ♡ セっくすっ♡ セっくすうっ♡
おちんぽっ♡ 先生のおちんぽっ♡ 待ちきれ無いっ♡♡♡」

娼婦の様な恥知らずの嬌声は、一つだけでは無かった。

「したいっ♡ セックスしたいっ♡ 先生早く来てっ♡♡」
「イクっ♡ もうイっちゃうっ♡ またイっちゃうっ♡♡」
「おしおきしてっ♡ アタシ悪い子っ♡ 悪い子なのっ♡♡」

男性教師のペニスによって、美少女達は自慰行為では得られない刺激の虜になってしまった。またあの刺激を味わう為、寮では自慰行為禁止の規則が堂々と破られるようになり、毎夜の如く誰かがレイプされ、種汁を注がれ身悶えているのだった。

「お願い先生っ♡ 今夜は私を選んでっ♡ おまんこをたっぷり潤わせてますっ♡ 先生のおちんぽ様が気持ち良くなれるように、沢山ほぐして温めてますっ♡ お願いします先生っ♡ 今夜は私を犯して、沢山汚して下さいっ♡♡」

競うようにして行われる自慰合戦の最中、廊下にガサツな足音が響く。それがまどかの寮部屋に近づくにつれ、彼女の声は大きくなり、腰の動きは一層激しくなる。そして、まどかの部屋の扉は開かれた。

「先生っ♡♡♡」
「よおまどか、サラも元気にオナニーしてるか？ 全くけしからん娘達だ。規則を破った罰として、今日も孕ませてやるからな」
「はいっ♡♡♡ 先生っ♡♡♡」

寮部屋の友人と一緒に、まどかは汗と愛液が滴る身体を躍らせベッドの上に飛び乗ると、尻を突き出してペニスを懇願した。固い男根を根本まで飲み込もうと、美少女達の膣がパクパクと口を開き、だらしなく涎を垂らす。

淫らな快感をねだり、まどかは切なそうに鳴き続けた。

終
わり



今宵は切なく
鳴いてはならぬ



切傷甲作

沖村まどかの日課は、毎夜の自慰行為であった。

彼女がまたがるお気に入りのベッドボードの飾りには愛液が丹念に塗り込まれ、すっかりいやらしい匂いが染みついている。今宵もまどかはネグリジェの裾を咥え、声を押し殺しながら一心不乱に腰を振っていた。

充血した乙女の陰核が、薄手のパンティ越しに刺激を与えられる。男を知らない肉壺から涎が溢れ、桃色の唇を潤わせパンティを湿らせていく。

(犯して……誰か私を、いやらしい私を犯して……♡)

か弱い自分が乱暴に犯される様を想像してまどかはより一層興奮し、快感に夢中になった。

妄想の中で、彼女は激しく犯されている。大きな胸がさらに大きな手で揉みしだかれ、丸い尻を何度も男の下腹部が打ち付けた。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「あんっ♡ あんっ♡ いやんっ♡ だめっ♡
中だけはっ♡ 中出しだけは許してっ♡」

強姦者はまどかの懇願を無視して、汚らしい粘液を彼女の胎内に注ぐ。ねっとり広がる熱は彼女の子宮を、腰を、脊髄を、そして頭を、じんわり溶かしていった。

「イクうっ……♡ イっくううう……♡♡♡」

汗だくの身体がブルブル震える。鼻息は荒く吹かれ、裾を噛み締める口から切なげに小さな声が漏れる。乙女を中毒にさせる快感が、まどかの全身を波打たせていた。

その時だった。寮のスピーカーから男性教師の荒々しい声が響いた。抜き打ちの自慰行為検査が行われる合図であった。よりにもってそれは、まどかの寮部屋が対象となっている。

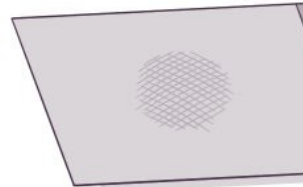
まどかは余韻を味わう暇もなく、急いで部屋から出た……。

「部屋番号214から
217までの生徒！」

「今すぐ部屋から出て
廊下に並びなさい！」

「これより
抜き打ちの
自慰行為
検査をする！」

「着衣はそのまま
5秒以内に
出て来い！」



「良いか
お前達！」
「学生の本分は
学ぶ事にある！」

「自慰行為にふけて
その事を疎かにするなど
言語道断だ！」
五ヶ条

一、自慰行為を
禁ず。

「まさか、純正性交遊を
股間をいじくり回して、
下着を汚している者など
居るわけ無いよな？」

「女...♡」

「.....
どうしよ.....」

ハハ

「.....」

「隠しても無駄だ
ニオイで分かる
からな……!」



「まあ 誰か
検査をする
かなあ?」

「パンティを
ヌレヌレに
してそうな
奴は……」



「お前か?
それとも
お前か?」

「ん……?」



「んん?」

あふあふ

「んんん?」



「なにが匂うぞ
沖村まどか!
欲情した女の
フエロモンが
プンプン匂うぞ」

!!



「だから
止めとけって
言っただのよ!」



「う……
ガマンでき
ないん
だもん……」

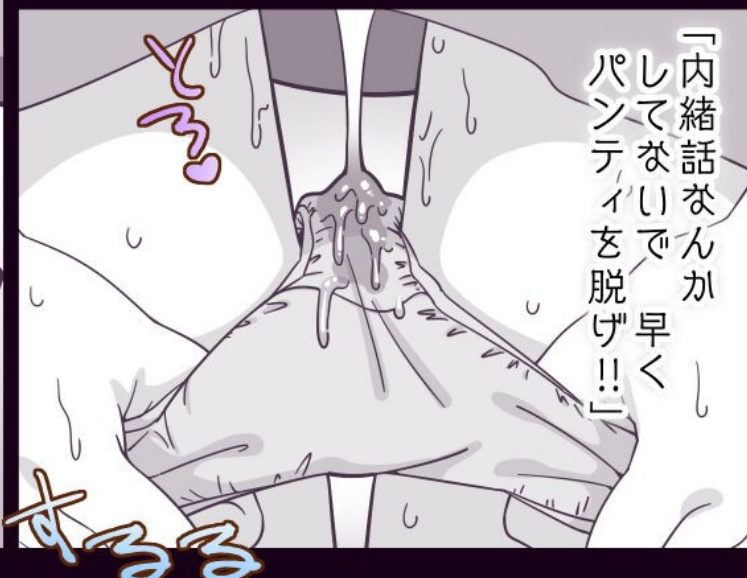
「なんだから?
繊維にジットリ
いやらしい汁が
染み込んで
じゃないか」

ぬる

あ



「内緒話なんか
してないで 早く
パンティを脱げ!!」



「パジャマを
たくし上げて
股を開け！」

「馬鹿者!!
こうやって胸まで
全部上げんか!!」

「ははは
い」
……

「……っす」

!?

「力を抜け！
触診検査だ！」

「あつ!!
ゆびっ!？」

ヒッ!

「あぁっ！
せ先生っ！
だめえっ！」

「パンティどころか
マンコの奥まで
ねっとりヌメって
いるじゃねえか」

「ち
お 違うんですっ！
オリモノで……っ」

「それにしちゃ敏感に
なってるみたいだぞ？
気持ちよさそうに
腰を跳ねまさせやがって」

「あぁんっ！
先生だめえっ！」

「し処女膜
破けちゃうっ！」

「口では嫌がってても
乳首はこんなに
嬉しがってるぞ？」

「あぁんっ いやんっ！
は、激しくしないで
下さーいっ……っ！」

「これが本当に
オリモノだって?」

「どう見ても
エロマンコ汁じゃ
ねえか……?」

「はあ……」

「はあ……」

「せ……」

「せんせ……」

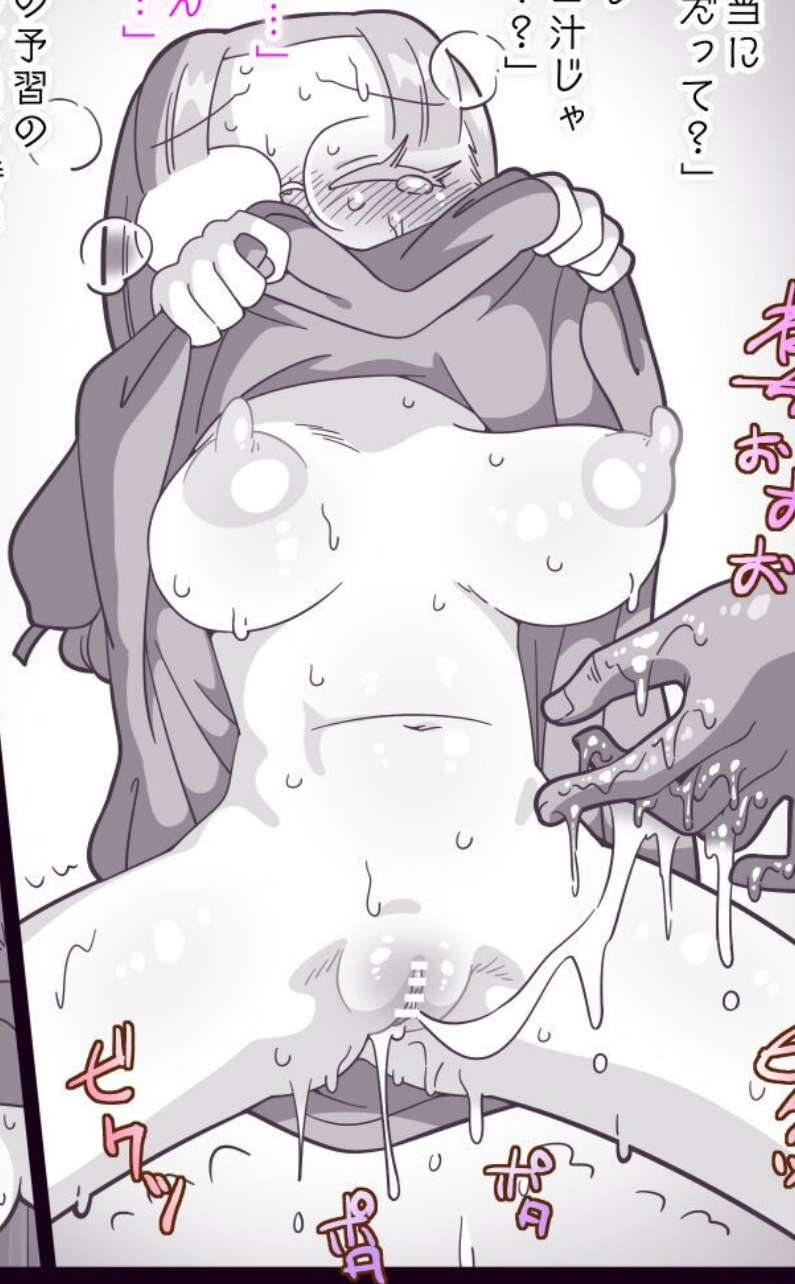
「ご……ごめん
なさい……」

「皆が明日の予習の
為に勉強している時に
お前はオナニーを
してたんだけ!」

「言い逃れは
出来んぞ!」

ネトネト

おな
おな
おな



「う……う……
許して
下さい……」

「謝るなら
皆にどううが!」

「あ……!」



「ご……ごめんなさい……
皆が勉強してるのに……」

「オナニーなんかして
ごめんなさい……!」

「声が小さい!!」

「オナニー
して
ごめん
なさい!!」



「寮の規則を破った者には罰を与えねばならん！」

「せ 先生っ！
待って下さい！
それだけはっ！」

「おちんちんを
入れるのだけは
許して下さいっ!!」

「あ あ あっ!!
だめ えええっ!!」

「駄目だ!
処女膜を破られる
痛みで自分の罪の
重さを自覚しろ!!」

「ひいひいっ!!」

「おっ
おごっ!!」

「俺のペニスで……
処女喪失しろ!!」

「ん!!」

「う……
あぐ……」

「ん!!」

「んざいひいっ!!」

「サチュン!!」

「あつ……
あつ……」

ニダニダニダ

「そ
さん
わ
た
し
の
……
は
じ
め
て
……」

ぬ
ぽ
……

ゴ
ー
ン!

「勉学を疎かに
する者は
こうなるんだ!
お前も良く
見ておけ!」

「あ
あ
あ
……」

「それだけ丹念に
マンズリかいて
やがっつんだ?」
「すっかり膣が
ほぐれて
チンポに
絡みついて
るぞ!」

「あ
ぐ
っ
う
ぐ
っ
や
め
や
め
……」

ず
ん
ず
ん
ぬ
ぽ
……

ど
ん
ど
ん

「念願のセックスだぞ?」

「もっと喜べ!」

「うううっ先生止めてえ……!」

ぬるるん!

「駄目だ!他の者へも見せしめでもある!」

はん! はん! はん!

にゅるるん!

「お前が犯されてる惨めな姿をちゃんと見てもらうんだ!!」

あは!!

「きゃあっ!!」

「ひいっ ひいっ ひいっ!!」

「ちゃんと勉強しないと男に股を差し出すなきゃ生きていけなくなるぞ!」
「それが嫌なら勉強しろ!!」

ぬるるん! にゅるるん!

「勉強出来ない女は大人しく孕んでろ!!」

「いやっ! いやっ! だめ先生!」

ぬるるん!

あは! あは!

はん! はん!

「中に出しちゃっ……
ダメえええっ!!」

「あっ あっ……
そんなっ……」

「中…… 精液……
赤ちゃん出来ちゃう……」

「勉強が出来ない
なり大人しく
がキ産んでろ!」
「それしか能が
無いんだからよ!!」

「あ あ 赤ちゃん……
先生との……
赤ちゃん……」

「何ボサッとしてんだ
舐めて綺麗にしろ!!」

「はへっへえっ!?
いいやんっ!
ばっちいつ……!!」

「誰のせいで
汚れたと
思ってたんだ!!」

「むぐぷっ!!」

「ポッ!」

「んっ!
んむうっ!」

「歯を立てずに
喉奥まで
咥え込むんだよ!」

「ほほほ」

「嫌っ……!!
先生のおちんちんの
毛のニオイ……
嗅がまれちゃうっ!」

「ヒュ!!」

「ペロペロ
舐め回して
チンポ洗え!」

「ぶぶぶっ!
じゅぶぶっ!」

「売春婦
みたいで
お似合い
だぞ!」

「んぐぷううっ!」

「ほほ!」
「ヒュ!!」
「じゅぶぶ!!」
「じゅぶぶ!!」

「むぐつ！
ごぷうつ！
ごぷうつ！」

「ふん
ふふ
ー
っ
！」

「あうう……」
「いやあ……」

「ちゅーちゃん……」
勉強します……
許して下さい……」

ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ

「あううっ！
はうううっ！」

「許すわけっ！
ねえだろっ！
性奴隷がよっ！」

「んーっ！
うううっ！」

ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ

「オナ狂い女に
二度目のチャンス
なんかねえんだよ！」

「いやらしい
音……♡」

「おちん
ちん……♡」

「反面教師として
無様な姿を
皆に見せつけろ！」

「あううっ！
はうううっ！
はひひいんっ！」

はぁ！
はぁ！
はぁ！

「ちゅっ……♡」

「はぁ……♡
はぁ……♡」

はぁ！
はぁ！

はぁ！
はぁ！

「すげー……♡」

はぁ！
はぁ！

はぁ！
はぁ！

はぁ！
はぁ！

びびる



「私 おかしくなっちゃうっ!」

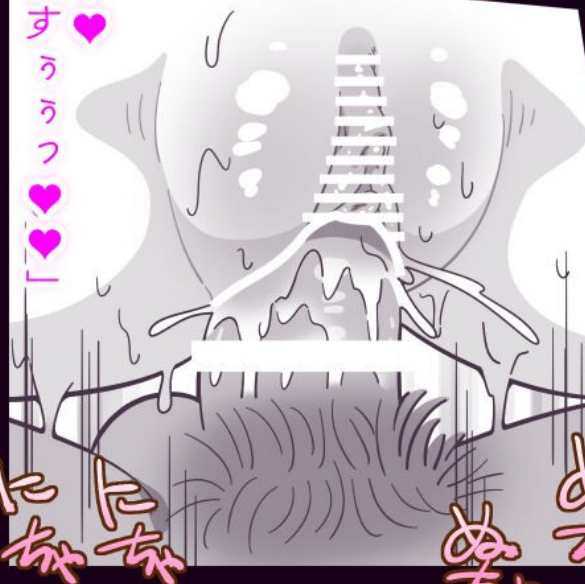


「先生っ! ダメですっ!」



「許して欲しけりやなあ! 子宮でザーメン飲んで受精しやがれ!」

「ははは いっ♡♡♡ じゅせいしますうっ♡♡♡」



にゃにゃ

ぬちよ

「だめ♡♡♡ だめ♡♡♡ つねっ♡♡♡ だめ♡♡♡ せつなくなっ♡♡♡ ちゃう♡♡♡」

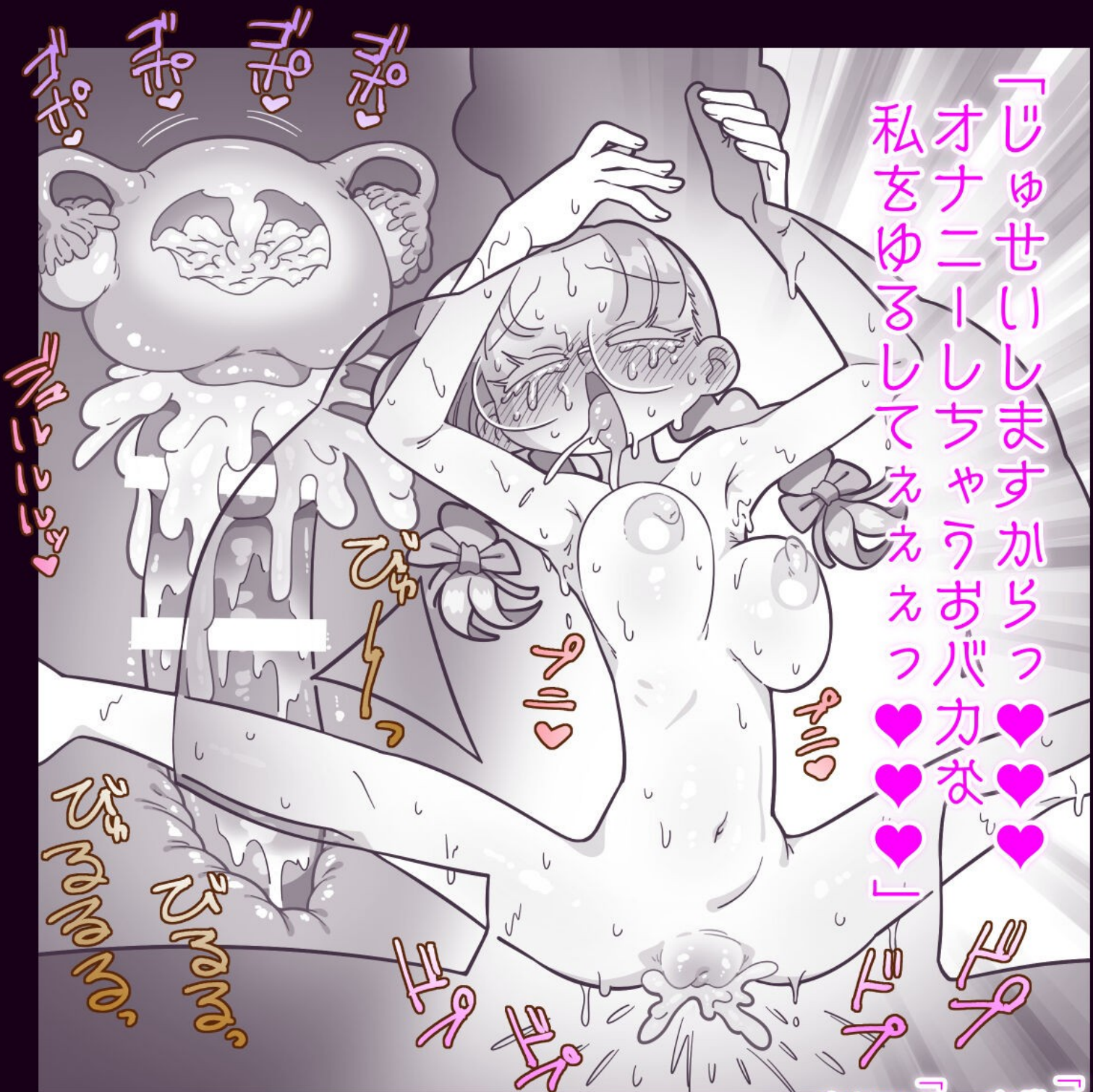


「お前の身体で ダメじゃない所があるのかよ!」

「全身敏感にして 孕み方がりやがって!」

もみ

もみ



「じゅせいしますからっ
オナニーしちゃうおバカな
私をゆるしてええっ
♡♡♡♡♡」

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ



「赤ちゃんに
なりゆう……」

「むぐうう……」

あーぽん!



「きゃーっ!
来ないでっっっ!」

「って何
何!?!」



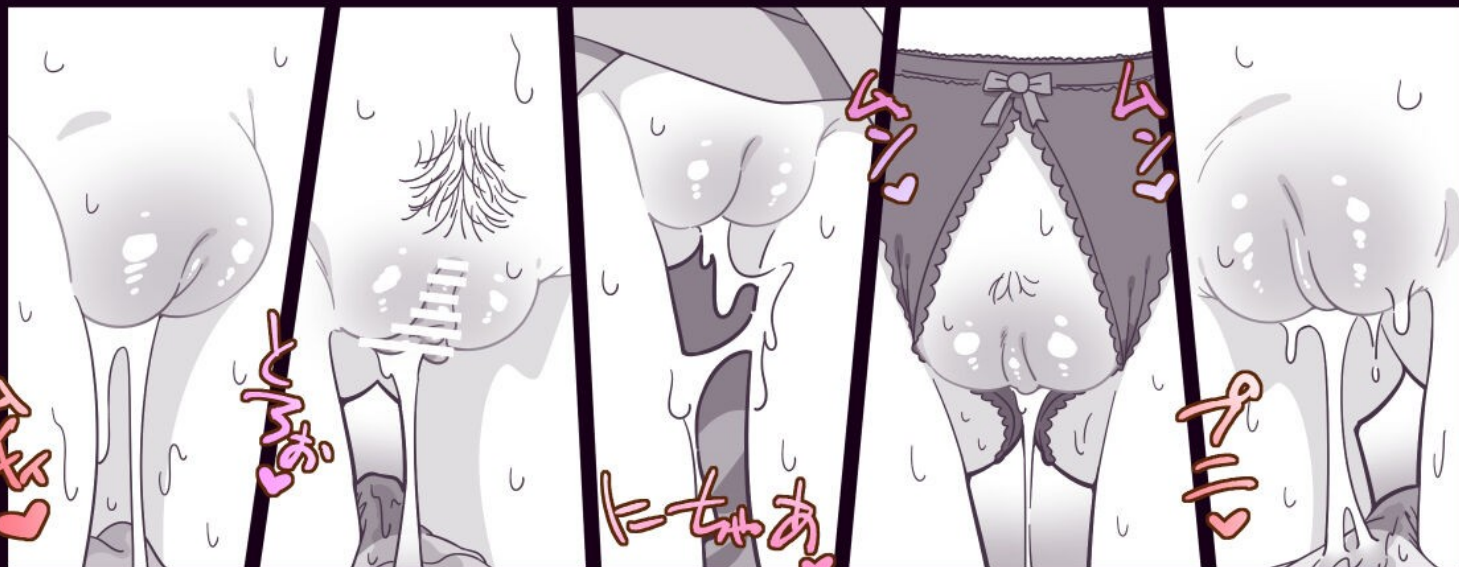
「るんるん♡
私ちゃんの卵子!」
子宮がポカポカ
で温かいから
ピクニックに
来ちゃっ♡」

ふわ ふわ

「ん？ なんだ
このニオイ……」

「お前達からも
オナニー馬鹿女の
エロいニオイが
漂って来るぞ」

「今すぐ全員
パンティを
下ろせ！」



「全く……！！
目の前で
友達がレイプ
されちうてのに」

「気を引き締める
どころが発情
しやがって！」

「そんな
ふしだらな
生徒にも
罰が必要
だなあ！」

「服を脱いで
一人ずつ先生の
前に来い！
犯してやる！」



「欲情しただけで先生の前に来い！ヒトミのようなイイ女ならいつでもレイプしてやるからな！」

「はっわん」

い い あ
や や ん
あ ん つ
ん つ ♡
つ ♡
♡

「ふめっっっっっっっっっっ」

ぴょん

「これくらいい
ぽっちゃりが
一番エロいんだ！」



「やっぱり女は
チンポの事しか
考えとらんのか！」

「罰として毎日
レイプしに来るからな！
夜になつたりマンコ
温めておけ！」

「ちっぷり
オナニーして
レイプの準備
します……♡」

「はい……♡
先生……♡」

「はあ♡
はあ♡」

今宵も、まどかはお気に入りのベッドボードの飾りにまたがって、自慰行為に耽っていた。いつもの様にネグリジェの裾で声押し殺す事も無く、寮に響くような大きな声でいやらしく鳴いていた。

「ああんっ♡ あああんっ♡ セっくすっ♡ セっくすうっ♡
おちんぽっ♡ 先生のおちんぽっ♡ 待ちきれ無いっ♡♡♡」

娼婦の様な恥知らずの嬌声は、一つだけでは無かった。

「したいっ♡ セックスしたいっ♡ 先生早く来てっ♡♡」
「イクっ♡ もうイっちゃうっ♡ またイっちゃうっ♡♡」
「おしおきしてっ♡ アタシ悪い子っ♡ 悪い子なのっ♡♡」

男性教師のペニスによって、美少女達は自慰行為では得られない刺激の虜になってしまった。またあの刺激を味わう為、寮では自慰行為禁止の規則が堂々と破られるようになり、毎夜の如く誰かがレイプされ、種汁を注がれ身悶えているのだった。

「お願い先生っ♡ 今夜は私を選んでっ♡ おまんこをたっぷり潤わせてますっ♡ 先生のおちんぽ様が気持ち良くなれるように、沢山ほぐして温めてますっ♡ お願いします先生っ♡
今夜は私を犯して、沢山汚して下さいっ♡♡」

競うようにして行われる自慰合戦の最中、廊下にガサツな足音が響く。それがまどかの寮部屋に近づくにつれ、彼女の声は大きくなり、腰の動きは一層激しくなる。そして、まどかの部屋の扉は開かれた。

「先生っ♡♡♡」
「よおまどか、サラも元気にオナニーしてるか？ 全くけしからん娘達だ。規則を破った罰として、今日も孕ませてやるからな」
「はいっ♡♡♡ 先生っ♡♡♡」

寮部屋の友人と一緒に、まどかは汗と愛液が滴る身体を躍らせベッドの上に飛び乗ると、尻を突き出してペニスを懇願した。固い男根を根本まで飲み込もうと、美少女達の膣がパクパクと口を開き、だらしなく涎を垂らす。

淫らな快感をねだり、まどかは切なそうに鳴き続けた。

終
わり

